

物質代謝論から人間と社会を考える 付録

「蝶の雑記帳 126-3」

Ⅱ. 社会と生産活動の人類史 素描

(A) 古代国家が形成されるまで

まず、古代社会の構造を考えることから始めよう。いところよりも近い血族の結婚を禁じる慣習があるとすれば、農耕と畜産の小社会では、血族的に区別されるいくつかの大小の家族が小さな集落を形成して生活する村落モデルが有効だろう。近世までそういう共同体が国家のような大きな社会の構成単位であった。耕作面積が増え飼育する家畜の数が増えて生産力が増大すれば、人口が増加する。村落の複数氏族の後継者は、近くの地域に出て別の村落を構成するようになる。これがくりかえされて、いくつもの村落のある中地域が構成される。その中地域はさらに、まだ血縁地縁関係を色濃く残しながら広がってより大きな社会を形づくるだろう。

社会(文化)人類学者は、そういう原初的な社会を、モデル的に氏族社会や部族社会ということばで説明してきた。ところが、近年では氏族社会・部族社会ということばの使用がひかえられるようになったと聞く。しかしその社会モデルは、現実に観察できない古代の社会を分析的に理解しようとするとき、一定の有効性をもつ。実際、人類学者 J. ダイアモンドは 2012 年に、伝統的な社会を考察する『昨日までの社会』

で、小規模血縁集団・部族社会・首長制社会・国家の四つの段階に分けて考えた。

この小節(A)は国家が成立するまでの初期社会を、したがって上の四つのカテゴリーの社会を考えようとしている。実際に現象したそのような社会が観察者からどのように観られたかを、歴史記述から例を引いて示してみよう。

日本列島の古代社会が大きく発展を始めたのは、およそBC800年代に九州北岸域で水稻栽培が始まってからである。この地域が中心域となって人口が増え文明が波及していったことを推測させる。その社会の発展のようすを、説明が簡略だが客観的な記述をしている中国の史書でたどることができる。『漢書』が、BC1世紀の状態を「楽浪海中倭人有り、分かれて百余国をなす。歳時をもって来たり献見すと云う」と書く。この文章を、楽浪郡から海を渡った九州北岸域に小規模な部族的社会が100ぐらいあり、その社会はおりおり漢王朝に出向く程度に進展している、と解釈してよいだろう。次の『後漢書』の記述は、AD1世紀に、「倭国から朝貢してきたので印綬いんじゅ(金印と飾りひも)を授けた…」と書く。直後の文に「倭国王」の名が出るから、倭人は、後漢が中心国の首長を王と認定できて、その地域が倭国と呼ぶことのできる程度の部族社会の連合を構成していた、と解釈できる。

次の『三国志』の「魏書」は、「倭人は帯方の東南大海の

なかの山島に国邑をなす、もと百余国で漢王朝に出向いてきた。(AC238 年)に三十国ばかりから使いが来た…、(その代表国)邪馬壹国の女王に親魏倭王の金印と紫綬を与えた」と書く。「魏書」の記述は、(地理の記述からそこが九州島で)それぞれの部族社会が首長制社会に移行して、中心国の首長が中国の王朝から金印を授かって王の権威を認定され、王として部族連合社会を統合しつつあることを示唆する。王の率いるその部族連合社会が近隣の大きな部族社会と戦争をしていることも書かれている。

倭人の社会は、統合の程度はよく分からないが、とにかく統合されていったと考えることができる。400 年代になると、中国南朝の史書は、倭国がすでに権威の確立した王が支配する部族連合王国に移行していたように書く。倭国王は、中華帝国が東アジアの諸王国に適用する位階制度にのっとった使持節都督の称号を与えられている。倭国の社会は、朝鮮半島の高句麗・百済・新羅の社会と同程度に発展して、500 年代には、おそらく王が支配の制度を整える段階に進んだ、と考えることができる。

日本の国内史料である『古事記』と『日本書紀』は 700 年代初頭に編纂された(史書というよりもむしろ王朝の正統性を主張する書という傾向が強い)が、日本列島の社会の具体相を教える。大和の王権は、小地域を代表する氏族の長たちが従属する形で、卓越する氏族の長を大地域を代表する首長とし、

その大首長がやがて王となった、と解釈できる。小地域は小さな部族社会だが、それぞれの氏族が村落をまたぐつながりをもっており、有力な氏族の長が婚姻関係を結ぶ他の氏族の支持を得て首長となった、と推測できる。そのような社会組織の拡大版が大和の王権を成立させたのだらう。この見方は、九州島での最初期の水稻栽培集団から中華帝国へ使節を派遣する初期王国へまでの社会発展にも当てはまるだらう。

古代日本社会についての以上の把握は、昔の史書がもっぱら政治史を記述するので、政治的な統合の面しかとらえていない。古代社会の経済的な側面は、遺跡からの出土品から推測するほかはない。園丁は、それを教科書に載る弥生時代とか古墳時代の説明程度にしか理解していない。

園丁に言えることは、一般に、初めて古代国家が形成される時代まで、農耕・畜産・漁労とそれに用いる農耕具・馬車・船ほか諸生産手段を生産する活動が産業の中心だったということである。もちろん、人間の生活が文化面にまで広がるほど高度化するにつれて多種多様な生産物が多量に生産されるようになるのは当然である。それでも、農耕・畜産・漁労関連の生産が中心で、それ以外の生産は従属的なものであった、とすることができる。

社会は、いつもその生産活動つまり経済に見合うように編成されていったはずである。もちろん、生産活動は生産され

る食糧を消費しその他の生産物を使用することで完結するのだが、血縁・地縁で大小の家族が結びついた初期の村落共同体では、生産物の消費使用はほとんどその村落で完結しただろう。天候などの自然条件によって農産物が十分得られないときには、野山に入ってかつての採集狩猟的な食糧調達をいただろう。実際、水稻栽培をしていた初期の弥生遺跡では、どんぐりなどが弥生土器に混じって出土する。人口が増えて初期の村落共同体が地域的に広がって小規模血縁地縁社会となっても、その社会内で生産物を調達する自給自足が基本だっただろう。そういう社会では、何らかの生産物の分配・交換の習慣が自然につくられたと考えられる（現代の社会人類学者による古代的な集落の観察では、生産物は一般に交換されると言ってもよく、交換を互酬と規定するほどではないようだ。互酬的な場合も人間心理による負い目が現われるという）。

互いに見知らぬ人がいるほどの部族的な社会になると、生産物の交換のために市が開かれるようになっただろう（市はすでに互酬の場ではない。かといって、生産を始めたころ家族関係がつくるごく小さな社会での生産物の融通を互酬と呼ぶのも適切ではないだろう。中間に位置する小社会を社会人類学者が調べている）。そういう部族社会がいくつも存在する広域では、生産物を運搬して交換することが必要になる。この段階で、生産物の運搬と交易が経済の重要な要素となる。「魏書」が倭人の朝鮮半島との金属材料の交易を記しているから、そのころの倭国の経済が運搬と交易を含む段階に至っていたことが

知られる。

経済を考えるときには、経済活動の場となる社会の組織が問題となる。血縁地縁で大小の家族間が結びついた初期の村落共同体では、家族的な人間関係が重要で、経験をつんだ一族の長老が尊敬をもって遇されることが起きただろう。氏族的な関係が拡大すると、氏族の系列を古くまでたどって中心軸にあったと見なされる家系が氏族の長の権威をもつようになった、と考えられる。日本では、藤原氏の氏の長者^{うじ}と呼ばれる方が成立し、幕府を開く権限を与えられた征夷大將軍は源氏の氏^{うじ}の長者が任命されるという慣例ができた。ローマでも、支配者となったカエサルはそういう家系の継承者であった。そういう氏族の長が、もし本当の老人なら一族のもののから生産物をもらうことが起きたと考えられるが、その習慣が制度化して、一族やそれに従属する人々から生産物を徴収する権限を獲得したのはどの段階からだろうか。園丁には分からない。

格差の原因の一つには、人口が増えて農耕・畜産・漁労に適した土地が減り、経済単位の家族あるいは一族のあいだに貧富の差が生じたことがあるだろう。それと同時に、人々が経済的に物事を考えるようになって、それぞれの家族一族ができるだけ多くの生産物を得ようと競争するようになったからだろう。また、少人数の争いでなく、部族社会のあいだに戦争が起きるようになったことが大きな原因だろう。戦争は平時の消費よりも多くの物資を必要とするから、その収集

権が必要になる。収集権は部族社会の有力な氏族の長たちがもつことになっただろう。また、多人数による戦争は指揮者を必要とする。有力な氏族の長たちのなかの適任者が、統率権をにぎることになる。その非常時の統率者が収集された物資の一部を取得することが起きるだろう（スパルタには二人の王がいて戦争の際に指揮官になった）。部族社会のあいだの戦争では、スパルタのように、相手の部族社会を征服し共同してその集団全体を支配して生産物の一部を徴収するか、アテナイ（4つの部族で構成された）のように、アテナイのそれぞれの家族が相手の部族民を奴隷にすることが起きてもおかしくない。部族社会の支配層である首長や有力者にとって、戦争は実入りの大きな事業であった。こういう状況のなかで、ギリシアのような奴隷制の社会でなかったところでは、大多数の人間は生産物の一部を租税として徴収される人民となっていたのだろう。

ともかく、古代史の暗がりの中でそういうさまざまなことが起きたのだ。そして、世界のどこでも、王が支配する国家ができたころには、王が王国全体を、王に従属する家臣や小領主や豪族が各地域を管轄し、人民の付属する土地を領有する形式で租税を徴収する体制ができたのである。元の大小の部族のいた小地域では、人民と土地を支配する王か領主のまわりに少数の従属者がいて、残りの人民は土地から生産される生産物の一部を徴収される領民になったのである。この制

度は長い年月を経て定着し、領民はそれを当たり前のようにして生活することになった。そして、多くの国で人民は、王や領主に徴発されて、ときどき彼らのために生産に従事する“労働者”になることも起きた。

愚かな園丁は、若いエンゲルスやマルクスがさまざまなことを学習しながら考えたことをノートに記述したのを真似て、対になる社会と経済そしてそれを制度的に支える政治について、観念的ではなく唯物論的で具体的な考察をしようとしている。素朴な考察だがまだ言い足りないところがあると思われるので、もっと続けよう。

古代には、農耕・畜産・漁労とそれに用いる農耕具・馬車・船ほかの生産手段を生産する活動が産業の中心だったことを確認した上で、他の産業のことを考えてみよう。生産物の種類が多様になりその量も多くなれば、すべての人民が農耕・畜産・漁労だけに従事するのではすまなくなる。つまり、村落共同体には、多様な生産物を生産する人々も住んでいたのである。近世の日本では村落共同体に住む住民をひとくくりに百姓ひゃくしょうと呼んだので、多くの人が百姓を単純に農民と見なしがちだが、その実態は中国での元の意味の百姓ひゃくせいである。彼らは多かれ少なかれ自家用の農地をもつが、農林漁業畜産以外の職業についていた人々もいたのである。時代が進んで生産物の量が増大すると、なかには雇用者をもつ規模の大き

い“企業家”もいた。

王国が成立したあとを考えれば、部族的な社会から王国内の一つの地方となった土地には、そういう百姓^{ひゃくせい}が住んでいたのである。社会経営の仕組みはようすを変えていく。多量の生産物を王や諸領主に届け、さらにほかの地方に届けることが必要になる。農林漁業畜産中心の王国でも、物資の生産・運搬・加工・交換・消費という循環する経済機構が存在したのである（それを呼ぶ適切な短いことばを思いつかない。マルクスが使う用語「生産過程」や「生産形態」というのはその全体を意味していると見なすのが妥当である）。つまりそこでは、相応の商業が発達したのである。中国古代の大きな城市はそのモデルである。そこには、王の宮殿だけではなく、常設の市場がもうけられていた。また例えば、王が塩の独占販売を手がけた。春秋戦国時代を記述した歴史書には、大商人が登場する。ただし、生産物の運搬・加工・交換・消費などの循環を担当する商人ほかの人々も王の統制下にあった。

古代、王が、人民つきの土地を支配するいわゆる農業を基幹産業とする国家体制ができたのだが、この体制で、王は副次的にほかの産業も支配したのである。つまり、王（と支配層）は、社会と人民を支配すると同時に、経済機構もおさえてそこから収益を得た。言い方を変えれば、王の統治機構は、大きな社会を、人民を支配し経済機構をも管理する政治制度によって統治した。そこには、外国に対しても国内に対して

も対応できる軍事組織があつて、その体制を支えた。中国では、しばしば軍事司令官が一つの地方を管轄して行政官を指揮した。人民がこの体制をくつがえすことはたいへんむずかしい。

経世済民の理念が存在したとはいえ、こういう社会の支配の反対側に保護があつたと見るのは考えすぎだろう。この社会の（主に農民からの）略取と（支配層と農民以外への）分配を、図式的に生産物の交換があつたと見るのが可能だとしても、その“交換様式”が農林漁業畜産とそれに付随する諸職業を基幹産業とするこの時代の社会のあり方を規定したととらえるのは、行きすぎだと思う。この体制は、村落共同体で生産する農民とその他の住民を生産の現場で支配し、そこで直接に生産物の一部を徴収した。そしてほとんどの人民は、徴収された自分の生産物から疎外され、その商業的な交換に参加することはなく、交換の場で支配されることが起きたのではなかった。交換にまつわる仕事をする人々を除けば、交換の場に、ほとんどの人民に作用するほど大きな実在的な「力」は存在しなかった。

今述べたことは言い過ぎだろう。世の中にとっても古くから貨幣という物があつたことが、再考を促す。生産物は心理的にもなんらかの値打ちをもつ。アニミズムの霊に捧げたり人へ贈り物をするときなどに、貴重な^{たくわ}貯えである食料や家畜などを用いることが起きた。捧げものや贈り物は気持ちを表

現する象徴物だから、ほかのもので代用することが可能である。経済単位である家族に生産物が不足する場合には、他の家族から融通してもらう必要が生じる。そういう生産物の分配は、受け取ったものに見合う物を返すことで円満に成立するが、ちょうど見合う物がないときには、代物を用いることになるだろう。そのような贈り物や物の交換などの場合に、習慣的に一定の媒介物を用いることが起きたのだろう。なんらかの値打ちを表現するその媒介物が、結局、貨幣という物になったのだ。

貨幣は、交換に時間がかかる場合にも交換しようとする物の値打ちを象徴的に表現しているし、遠い場所のあいだで物をやりとりする場合にも物の値打ちを表現することができる。貨幣が習慣的に使われるようになれば、貨幣は富を体现すると考えられるようになり、人々は富を貨幣で貯えるようになる。その貨幣はやがて、時間が経っても目減りすることのない金属になった。金属貨幣は重さを計ることで時と場所を超えて値打ちを体现できるから、一般に、交換する二つの物の値打ちを評価する手段ともなる。

世界に王の統治する国々ができたころ、貨幣の使用が一般的になっていた、としてよいだろう。近代・現代の社会から古代の社会を想像しながら考えている園丁は、経済のことを知らないからうまく説明することができないが、ともかく、アダム・スミスの言う“神の手”つまり「成り行き」が社会

で貨幣を用いる経済を現行の機構へつくり上げていった、と園丁は思う。しかし、世界のどこでも、社会と経済はおおよそ同じような成り行きをたどったから、この進展は、地球の自然的条件のもとで人類が本性に従って選んだもの（やり直しができないが）、と考えるべきだろうか。

貨幣を用いる社会になるころには、農業の生産高が増大しただけでなく、農林漁業畜産の生産物以外の生産物もいっそう多様で大量になっていたはずである。大量の生産物の流通は、人民つきの土地を支配して生産物を徴収する体制を変質していっただろう。王と支配層の徴収する生産物には、布など日本で言う「調」の比重が増したと考えられる。支配層は、徴収物を売りに出して貨幣を得る行動に出ただろう。それはごく初期からあったことなのだろう。生産物の交換には初めから支配層の徴収物がふくまれていた、と考えなければならぬ。生産物の増大とともに生産物の循環が増大していき、経済の規模が大きくなる。

循環経済の規模が増大していくにつれて、村落共同体のなかから農産物生産を本業とする農民とは別のさまざまな種類の物品を生産する人々が増えていっただろう。そういう人々は市に出向く代わりに集住するようになり、町ができたのだ。あるいは王や有力な領主の居住地がそういう人々を引きつけて都市ができた。そういうなかで、できつつあった便利な都市に支配層が集住することも起きるだろう。

* * *

くりかえしになるけれども、こうして、人民つきの土地を支配して生産物を徴収する体制は、農産物以外の諸物品の生産とそれを流通させる経済も組みこむものだったのである。その経済には支配層の徴収物も加えられる。王のいる支配体制は、一方で人民を構成員とする社会を支配する機構を備え、他方で生産物を生産・流通させる経済機構を備えて、それらを統合して運営された。それを表現するのが東アジアの「経世済民」という観念で、王の体制はそれを理念化した。

しかし、人民つきの土地を支配して生産物を徴収する体制の基幹部分が変わったのではない。大多数を占める農民はやはり生産の場で直接の支配を受けたのだ。生産物流通が村落共同体まで入ってきたとしても、長いあいだその支配が緩むことはなかった（貨幣が村落共同体まで入ってきて、貨幣による負債を負って部分的に経済的な支配を受ける人が出たとしても）。町に集住した人々は経済の機構に組み込まれたが、その割合はまだ大きくなかった。だからこの体制の社会では、柄谷行人の言う交換の力はまだ副次的なものだった、と園丁は考える。

貨幣が流通する以前にも、原初の大小の数家族からなる小さな社会から部族的な社会に拡大するころまで、捧げものや贈り物が精神的には大きな意味をもつただろうが、生産物の贈与と返礼が人々の現実的な行動を支配するほどの力をもつたと考えるのは、やはり行きすぎだろう。

ここまで考えたら、古代に成立してのちの社会を規定することになった国家体制の基本的あり方をおおよそ把握でき、対になる社会と経済そしてそれを制度的に管理する政治の仕組みをおぼろげだが理解できたように思う。

しかしまだ、宗教のことを考察していない。マルクスとエンゲルスは『ドイツ・イデオロギー』で宗教的で観念論的な考え方から抜け出したが、現代にも、ことばの綾だとしても、宗教的な観念の力が、経済の事象やさらに文化的な事象にまで力を及ぼすと考える人がいる（柄谷行人や大澤真幸といった影響力のある人たち）。唯物論的に考えようとしている園丁も、宗教という問題を素通りするわけにいかないだろう。

古代の人間たちは、自分たちだけでなく生物や岩や泉なども霊的な何かをもつと考えた。アニミズムと呼ばれる事象である。そこから宗教が生まれたと考えることが順当だ、と園丁は考える。実際、古代世界で人間は、多くの出来事を宗教的にとらえることをして、世界のどこでも一定の社会が形成されるとき、宗教儀礼をとり行なうようになった。宗教は人々の行動に影響力もつので、社会は宗教儀礼を取りこむように組織されたのである。そうして、ほとんどの古代国家は、制度と儀礼の形式で政治と宗教を複合する組織を形成した。いわゆる神権国家はそうにして成立した。その伝統は長く続き広く社会に浸透して根つき、宗教は、のちのちまで社会と経済のメカニズムに影響力を発揮することになった。

しかし園丁は、人間の食料その他を生産する生産活動にマルクスが与えた別の呼び名「物質代謝」を論じているこの考察で、宗教的な観念が重要事だとは思わない。さらに人間の文化・文明的な活動を含む生活全体にかかわる「物質代謝」まで言及することが必要だとも思えるが、園丁の手にあまるからその内容にまで踏みこむことはできない。

(B) 王のいる社会システムが成熟した中世

前小節(A)で、王の支配する体制が成立したあらすじと経済のようすをなんとか整理してみた。その政治体制と経済機構をもつ社会は、のちに王国が分解したり外部から征服されたりしても、新たに組織される王国は、基本的に以前と同じやり方で人民つきの土地を支配した。地域によって時代の区切りはまちまちだが、おおざっぱに 1300 年代まで、社会はゆるやかに変化しながら、体制の基本形は変更を受けず続いた。その時代は中世と呼ばれる。のちのヨーロッパでは暗黒の時代と呼ばれることもあったが、中世はけっして進歩のなかった時代ではない。ゆるやかな変化でも長い時間が人間の文明を発展させ、物資の生産量が増大し人口が増えた。経済機構は徐々に緻密に編成されていき、文化は豊かになり社会は成熟していった、ということができる。そうでなければ次の近世の発展はなかっただろう。

たとえば、日本の歴史家内藤湖南は、1000 年ころの中国の

宋帝国がほとんど近世と呼べるほどの社会に近づいた、と見た。広い国土と大きな人口をもつ中国は古代からの文明をよく継承した。土地の私有が認められ、資産に応じる税を貨幣で徴収するようになったのは唐代からである。宋代、長江下流域で耕地面積が増え水稻栽培の技術も進み、華南全域で生産量がうんと伸びた。諸産業が発展し商品の全国的な流通が進んだ。村落共同体の生産物も商品として生産され、地域ごとの特産品が生まれた。代表的な絹や茶は、国際交易品になる。中国が世界で最良の陶磁器を生産するようになったのも宋代である。種々の鉱山開発が進み、石炭も流通して使われるようになった。商業も発展し、農業の租税にくらべられるほどの税収が得られるようになった。商人や職人が行^{こう}と呼ばれる同業組合をつくる。銅銭が大量に作られたいっぽうで、世界で初めて紙幣が発行されもした。村落共同体に貨幣経済が広まり始め、小作ばかりでなく労賃で雇われて働く者や、副業をもつ者が増えた。

南シナ海では、外国商人に加わって中国人が海外貿易にのり出し、広州や寧波などの貿易港が栄えた。1100 年ころの中国の人口は推定でおよそ 1 億人、1500 年ころのヨーロッパの推定人口約 5600 万人よりもずっと多い。世界都市となった首都開封の人口は約 100 万人という推定がある。そこにはユダヤ商人もいた。政治・軍事の中心だった都市が経済的な商業都市の側面を強くする。それまでなかった通りに面した商店街が出現した。開封の繁栄ぶりを描いた絵巻物「清明上

河図」が、これらのことを象徴的に示している。

先進の中国社会の例は、中世の人類社会がどの方向に進んでいったか、経済機構がどのような形態になっていったかを教えてくれる。その進展を、土地とそこに住む住民を支配する社会体制に、貨幣経済が浸透して貨幣循環型経済機構を編みこんでいく過程であった、と要約することができる。経済の面に注目すれば、中世は、のちの資本主義の基本の機構が根づいて次の段階の発展を準備した、と言える。

この状況をもう少し別のことばで表現しておこう。社会体制の骨格は、依然として土地とそこに住む住民の直接的な支配である。村落共同体に住む農林畜産漁業従事者は、その生産の現場で強制力によって国家から租税を徴収された。それでも、手元に残る生産物で自給自足的な生活をする事ができ、生活全体の主体性（マルクスの言う和気あいあいさはそこからくる）を失ったのではない。しかし、生産物の一部を貨幣に替えなければならないから、生活様式をこわすほど全面的ではないとしても、貨幣経済が浸透して、貨幣がもつ経済的な力の作用を受けるのをまぬがれなかった。貨幣の負債があれば生活は現実には圧迫を受けた。けれども、その圧迫は柄谷の言う（生産物の）交換様式からくる抽象的な力とは異なる、とわたしは考える。

まだ比較的小規模な諸産業でもその集成と大きな規模になりつつあった商業は、それに従事する人々の生活を変質さ

せる。それらの人々が都市に集住すれば、都市の社会は村落共同体とは異なるものになっていく。王国の住民は、村落共同体に住む人民と都市に住む市民に分かれていく。そして、資本主義的な経済機構は徐々に、商業が王国内の村落共同体へ貨幣経済を浸透させることによって編み上げられ、その機構のおもな担い手となったのは都市社会と都市市民だった、と考えてよいのだろう。マルクスが資本主義社会を考察するときに使うことば市民はそういう都市の住民を指す。

宋の経済的な繁栄は、帝国の広大さだけに依存したのではなく、外国との交易にも依っていた。古い時代からのシルクロードが大事な交易ルートであった。漢代に版図に入った陝西省西側の回廊で漢人の人口比率が増加したのは宋代だという。物資の交易量の大きさにそれよりも重要だったのは、やはり昔からあった、南シナ海—東南アジア—インド洋東・インド南部・インド洋西—ペルシャ湾・紅海を通して西アジア・エジプトへとつながる海上交易路であった。このルート上にあるインド南部それにもまして西アジアは同時代の宋ほどでなかったとしても、宋の経済状況と似ていた。中世世界の経済の拡大は、大きな人口を擁する中国・東南アジア・インド・西アジア・エジプトのあいだの外国貿易によってもたらされたのである。この交易ルートは、さらに地中海を通してヨーロッパにつながっていた。その経済的な魅力がヨーロッパの十字軍が西アジアへ向かった大きな要因だっただ

ろう。その“交通”が西アジアにくらべて遅れがちだった中世ヨーロッパに刺激を与えることになった。

中国で発明された火薬・羅針盤・活字(木製)は、1000年代に実用段階に達した。火薬と火器が実戦で使われるようになり、貿易船に羅針盤が備えられた。それらの技術は、順次、おおよそ遊牧民の建てたモンゴル帝国が世界を席巻するころ、西アジアに伝わったのだろう(羅針盤が伝わったのは海上航路を通してのことで少し遅いのかもかもしれない)。それらは、ヨーロッパへ西アジアを経由して伝播した。

(C) 資本主義経済機構が王政を突き崩した近世

中国は、モンゴル帝国に征服されて社会は混乱したが、元代、西アジアにまでつながるモンゴル諸国を通じて経済面・技術面での発展は続いていた。陸上の交易路に加えて、西アジアにつながる海上交易ルートは、世界の全体的な社会と経済の発展に合わせて規模を拡大していた。

1400 年ころ安定した明は本物の近世の帝国であった。構成単位だった村落共同体の土地と人民を政治的に支配して租税を徴収する体制は、依然として中核にあった。そして、村落共同体が生産する農業生産物とほかの種々の生産物に、諸都市で生産される多量の物品が加わって循環する経済機構が働いていた。貨幣で測られる商業的に循環する富の方が目立つようになっていても、支配層である皇帝とその官僚たちおよび諸地方の大地主たちは、土地と人民を政治的に支配

することの方が主であるという考え方をしていた。高級官僚がお金を貯めて隠退すると、より安定的な収益法と考えて土地を買い入れることが多かった。この社会では、土地と人民の支配が、経済機構に参加する商人たちを支配する現実的な力にもなっていた、と考えることができるだろう。

しかし、実際に経済の現場で、資本力のある商人が糸や布などの生産品を作る職工を組織することが始まった。初めは職工に賃金を払ってそれぞれの家庭で綿や絹の糸を紡がせ布を織らせていても、やがて資力のある者が、自己の所有する建物に織機などの生産手段を備え、賃金労働者を雇って生産する形態が生まれた。まだ手工業の段階にあるが、ヨーロッパでマニファクチャーと呼ぶ工場である。近世後期には、そういう生産形態の諸産業が始まった。

ところで、海上交易ルートでつながる諸地域の経済も遅れていたわけではない。それを教える出来事が、鄭和の前後 7 回の大航海である(多いときで総員 2 万・60 隻余とされている)。ペルシャ湾入り口、アラビア半島南岸、アフリカ東海岸まで達した。

このルート上の国々では、外部からの異民族の侵入によって王国が交代して時々社会に混乱をもたらしたが、中世的な支配は継続した。1500 年代にインド亜大陸でムガル帝国が成立した。インド南端部は征服をまぬがれて海上交易ルートは中断せず、経済は国境を超えるから、ムガル帝国もそ

の交易に参加したのである。1400 年ころトルコと呼ばれるようになる地域と対岸のバルカン半島にオスマントルコ王国が成立し、のちに西アジア・エジプトさらに北アフリカまで版図とするオスマントルコ帝国に発展した。東の明と西のトルコを結ぶ海上交易ルートは、交易をいっそう活発化するようになった。

さて、中世から自治都市だったイタリアのヴェネチアやジェノヴァなどは、末期東ローマ帝国を中心とする東地中海東岸域との海上貿易を行っていた。その交易は、ヨーロッパ内陸地域さらに北海・バルト海沿岸域にまでつながっていた。北の地域にある商業都市はハンザ同盟を結んで経済的な連携を強めていた。ヨーロッパにも、農産物だけでなく諸産品を生産しそれを流通させる経済的な機構が早くから存在したのである。近世になって、オスマントルコ帝国が地中海に覇権を築くと、イタリアの東方貿易は勢力を削がれてオスマントルコ主導になったが、遠く明につながる海上交易ルートは、ヨーロッパの地中海沿岸域から北の内陸部さらに北海・バルト海沿岸域まで延長されることになった。明の陶磁器がヨーロッパにまで運ばれた。近世前半、ヨーロッパ経済はその交易と歩調を合わせてしだいに発展したのである。

その交易ルートから外れていたポルトガルは、1400 年代、大西洋をアフリカの沿岸沿いに南へ向かい、島々を占領し領土にしていった。1480 年代に赤道へ、さらにアフリカ南端の

喜望峰にまで到達した。1492 年、スペインがイスラム教徒を追いつ追出したばかりのグラナダで、コロンブスという男が女王に面会を求めた。大西洋を西へ向かった 100 人ぐらゐ乗った 3 隻の船が“西インド諸島”に到達することが起きた。ローマ教皇が、スペインとポルトガルに大西洋の西側と東側の海外諸国を山分けする認可を与える。

1498 年、ポルトガルのヴァスコ・ダ・ガマが、アフリカ東海岸のモザンビーク、さらにインドの西海岸に到達した。スペイン人は、ユーラシア大陸よりも物的文明力の劣るアメリカ大陸を比較すれば容易に征服していったが、インド洋は西アジアのイスラム商人たちの交易圏だったから、ポルトガル人の遠征は最初から暴力的になった。1500 年代に入ると、強力に武装したポルトガルの艦隊はインド洋の制海権をにぎる。しだいに、アフリカ・ペルシア湾入り口・インド・スリランカ・マラッカ海峡・インドネシア諸島に、拠点の要塞都市を築いて、インド洋から南シナ海までの海上貿易の最初の覇者となった（明は自国民が海外へ乗り出すことを禁止するようになっていた）。

スペイン人たちは、アメリカ原住民から金・銀やめづらしい産物を奪いヨーロッパに送って利益を上げ、さらに、移住して原住民を酷使する規模の大きな農場経営を始めた。ポルトガル人はインド洋への航海の途上でブラジルにも至り、そこを領土とした。そこには金銀が見つからず、スペイン人と

同じように、大農場経営型の植民地経営を始める。そこでは砂糖キビ（のちにはコーヒー）などの生産に主力が注がれ、現地住民の人口が減ると、アフリカの人々も奴隷として買入れて強制労働をさせるようになる。この“植民”と呼ばれる土地と住民の支配のやり方が主要な形態となる。その農産物もほかの諸物資も商品として生産され、ヨーロッパへ持ちこまれた。アメリカ大陸の土地と原住民・アフリカ人の労働が生み出す富がヨーロッパへ持ち出されたのである。

1500年代中ごろ、南米ボトシに大きな銀山が発見されると、大量の銀がヨーロッパに運ばれた（一部はアメリカ大陸から太平洋を渡ってフィリピンのマニラに運ばれ、中国へ流れるようになる）。貨幣でもある銀はヨーロッパ経済を膨張させて、ヨーロッパに大きな富をもたらすことになった。

こういう状況の進展のなかで、ヨーロッパの経済活動の中心領域で、北部イタリアから内陸部を通り北西ヨーロッパへつながる交易ルートが基幹となってさらに発展した。はじめは東方貿易のおかげでイタリア北部が経済循環の結節点であったが、ジェノヴァに流れこむアメリカ大陸からの富が、この基幹ルートを通して流れが太くなるにつれて北西ヨーロッパの方に経済の重心が移動した。それには、ヨーロッパ大陸の大西洋岸域と北海・バルト海沿岸部の海上交易ルートも寄与した。1600年代になると、オランダが経済循環の心臓部となる。

ヨーロッパ周囲の海上交易と内陸部の交易は、東地中海域とアジアに古くからあった西アジア・エジプトから中国への交易ルートにつながり、そこに新たにアメリカ大陸からの大西洋ルートと大西洋—インド洋ルートが加わることになった。それに、先ほど言ったように、アメリカ大陸の銀の一部は、太平洋を渡ってフィリピン・中国へ流れこんだ。こうして、古代人類が世界に広がっていった以来初めて、グローバルな経済の循環運動が本格的に開始した。これを、ウォーラステインは「世界システム」と呼んだ。

1500年代にユーラシア大陸でポルトガル人たちが要塞都市を拠点として行なったのは基本的に中継貿易で、そこからヨーロッパへの富の持ち出しは大きくはなかったのかもしれない。しかし、その貿易は、やはりヨーロッパの経済に刺激を与え、地中海の東方貿易に参加できなかった国々にとって魅力的なものだった。北方に位置するが海に臨んで水上交通になじんでいたオランダやイギリスが、大西洋に乗り出す。続いてフランスも加わった。これらの国の人々は、原住民が匹敵する農業を営まず人口密度の低い北米大陸に移住すると、自分たちで農業を営むことになった。そこでは、基本的にヨーロッパ型の社会が形成されることになる。ただし、地域の土地を支配する領主はいないから、最初から同時代のヨーロッパの政治体制とは異なり、自由な市民の民主的な社会であった。ただ、気温の高い南部では、綿花の栽培などスベ

イン人がやっていたアフリカ人を奴隷として働かせる大きな農場経営に進んだ。その社会の骨格となる構成はヨーロッパ型と言えるが、奴隷がいるから古代ギリシアの都市国家に似ていたのかもしれない。

遅れて海外へ進出した蘭・英・仏は、カリブ海沿岸域でスペイン勢の手薄な土地を占拠した。そこでは、スペイン人・ポルトガル人たちと同じように大規模農場経営を行なった。後世まで知られることになる砂糖などの栽培はそうして始まった。そこにもアフリカ人奴隷が買い入れられた。その経営は貨幣で富を増やす資本家的なもので、ヨーロッパ人の人口はあまり増えず、アフリカ人とその混血の人々が人口の多数を占めるようになった。ここで、アフリカ人奴隷も商品として売買され経済的な利益をもたらしたことに触れないわけにいくまい。

残酷な表現にならざるをえないけれども、アメリカ大陸の原住民は強制労働を強いられたり大土地所有者に従属する小作人または労働者とされた。連行されたアフリカ人はアテナイ式に農場経営者所有の奴隷として扱われ、いずれも人間がほとんど暴力的に直接支配を受けたのであって、経済的な利益は、商品交換からではなくそれらの労働者の生産した生産物によって産み出されたのである。ヨーロッパ資本の本源の蓄積の大きな部分は、資本主義ということばが似つかわしくないほど経済外的な暴力によってなされたのである。その社会的あり方を『ドイツ・イデオロギー』流に言えば「交通

形態」であるが、「交通」を「交換」と言い換えることはできない。

オランダとイギリスの商人たちは、ポルトガル人のあとを追ってインド洋と東南アジアに向かい、貿易競争をくり広げた。イギリスとオランダが東インド会社を設立したのは1600年と1602年である。その会社は、条約をむすび、軍隊で戦い、植民地を経営するなど、海外で大きな権限をふるうことを認められていた。すでに、資本主義の経済活動は政府の政策と一体となって進められたのである。始動を始めた世界システムの最初の覇者となったオランダは、ポルトガルが築いたインド・スリランカ・マレー半島などの拠点都市を奪っていく。イギリスが、さらにフランスもあとを追う。オランダは台湾を一時的に占領したが、基本的にはまだ遠い中継貿易で、輸送量はそれほど多くなかった。

1700年代に入ると、資本主義的経済循環の心臓部はオランダからイギリスに移った。両国は、折り合いをつけて、オランダがインドネシアを、イギリスがインドを勢力範囲とするようになっていた。その支配が領土的なものになったのは、1700年代後半のことである。オランダのインドネシア支配は、ナポレオンに征服された時期に中断し、政府直轄地として現地行政府を置くのはそのあとのこと。イギリスのインド支配は徴税権を獲得して支配地を拡大していく。フランスはナポレオンの敗北によって、“植民地”獲得競争から一步後退を

余儀なくされた。

イギリス・オランダの領土支配は、土地から上がる富を領主として略取する。つまり、ユーラシア大陸に昔からあった異民族による征服と同じく、土地と人民を直接支配する形態である。この形態の支配を漢字で“植民”と表記するのは正しくないだろう。ともかく、資本主義は、昔のやり方でも役立つならそれを活用するということが判る。まだ始まったばかりだが、この形態による海外の領土的支配が、ヨーロッパの資本主義経済をさらに拡大させることになる。

考えようとしているのは、資本主義的社会システムである。長くなっても、社会システムの他の側面を観察しなければいけない。人間と人類社会の全体的な「物質代謝」は多面的なのだから。

宗教は、アニミズムの昔から、人々の生活の仕方と考え方の規範を与えた。社会に秩序をもたらすその働きを、社会を統率する王の国家は、自己の組織と制度をうまく運営するために利用した。ヨーロッパにはローマ教会が西欧の全域に位階制度をもつ組織として存在し、土地と人民を支配する領主でもあった。文明の進歩はその宗教のあり方に疑問を感じさせずにはおかenないことを明らかにする。1500年代に入って、ローマ教皇が大聖堂建設費用をまかなうために、この世の罪すべてを許す証書「贖宥状」^{しよくゆうじょう}を売り出すことにした。神聖ローマ帝国(領邦に分かれていたドイツ)

では、一人の大司教の世俗的な欲望がからみとくに大々的に売られた。これには神学者のあいだでも疑問がもたれ、M. ルターが一枚の意見書を公開掲示する。

これがヨーロッパに思いがけない宗教的な動乱を引き起こす。ローマ教会を尊重する守旧派と教会改革を求める改革派の対立が長く続くことになった。この対立は、ドイツとフランスで領主たちが二手に分かれて戦う血を流す戦争になった。フランスでは新教からカトリックに乗り換えた国王がナントの勅令を出してようやくおさまったが(1598年)、ドイツでは1600年代にも長い戦争が続いた。ほかの国でも宗教的な騒動が起き、スイス・オランダ・イギリスは新教の国になった。

結局、ヨーロッパで宗教は政治の場面から退場し、信教の自由が建前となった。この宗教戦争は人々の宗教観を損なった、と言えるだろう。北西ヨーロッパでの資本主義経済の勃興にその地域の人々の新教信仰が重要な働きをしたという考えに、園丁はそれほど賛成できない。

思想状況を大局的に観ると、近世ヨーロッパの思想は他の国々とくらべてはるかに「開明」の方向へ向かったととらえるのが大切だ、と園丁は考える。近世人は中世人よりも自由になって、物事をより現実的に論理的に考えるようになった、と言える。1600年代以後、人の往来のさかんなヨーロッパ社会に開明的な思考をする人々が増えていった。マグナカルタ

以来独立心の強いイギリスで最初に成果をあげたその思潮は、イギリス・フランス・ドイツ……と西欧に広まった。

人名を挙げながらそれを知ることは重要だと思うが、記述するゆとりがないので省略する。ただ園丁は、理性的に考える啓蒙運動が1700年代の社会で高まりを見せたことを強調しておきたい（それはフランスの首都パリで次の時代の幕開けを準備する）。近世の社会で、この人間理性の開花が主導した心性が、資本主義経済の成長と共鳴していたと考えるのは妥当だと思うが、それを経済的な活動とあまりに強く結びつけて考えることに賛成できない。園丁が最も注目すべきだと考えるのは、1700年代の最後の四半世紀にカントが到達した認識論は人間の開明的な思考を後押しするものであったということである。カントの書斎にルソーの肖像画が掲げられていたことが、近世終末期の思想状況を象徴している。

近代科学を先導することになった科学的な方法はガリレイによって“発明”された（1500年代末～1600年代初め）。現実の事物事象を実験的に観察する態度は、近世思潮のうちにあり、決して神秘的なものではない。次代のニュートンは、自然物の普遍的な運動を説明する力学法則を発見し、惑星の運動規則（ケプラーの法則）を説明できる力として万有引力を見出した。その遠達力は、それまでの考え方から遠かったけれども、ただ理詰めで導出された。決して神秘的なものではない、たとえニュートンが神の存在を信じていたとしても。

そして、カントの認識論は、そういう自然現象をただ理性によって研究する自然科学の基礎を据えたのである。自然科学の研究は、資本主義経済とその時代の社会に歩調を合わせて進展したが、大澤真幸の言うように資本主義の論理に負っているのではない。自然科学の論理は自然の側にある。

近世の記述が長くなったが、近代からの経済発展は量的な規模が異なるものになるとしても、この小節(C)の記述は基本的にそれを準備した社会と資本主義経済というものを描いている、と思う。

(D) 資本主義システムが人類社会を覆い尽くす現代へ

前小節(C)で、近世社会で、資本主義の経済機構が主導的な役割を果たすようになっていたことを見た。その経済機構にはすでに現代社会で見られる主な機能が明確に働きはじめており、現在用いられる主要な経済用語がみな適用できるような状態に達していた。広義の社会で、資本主義的経済機構にふさわしい考え方と行動をする市民が、人口比率では土地に強く結びつけられていた昔ながらの人民よりも少なかったが、政治・経済的な勢力としては上まわろうとしていた。誇張して言えば、1700年代末期の社会にまだ残っていたのは、昔ながらの王がいる古い政治体制だけであった。

フランス王国は、絶対王政と呼ばれるほどの強い体制を誇

っているように見えた。その絶対という形容詞は、ついに昔の封建領主たちを圧倒する地位に登ったことを意味していたが、王の政府の重商主義政策によって獲得した経済的な力をも表現していた。しかしフランスには、まだ領主に年貢の徴収権がある封建制と身分制が残存していた。古い政治体制と経済機構は調和せず、王国の財政が悪化した。王の政府が見つけた解決策は貴族に課税することだった。ところが貴族たちがそれに反対する。1789年、175年間開かれたことのなかった三つの身分（貴族・聖職者・平民）の全国三部会を招集することになったが、それが政治情勢を一気に流動的にすることになった。

名のように三つの部会に分かれていた議会は、5月ヴェルサイユ宮殿で開かれたが、波乱の船出をする。貴族層・聖職者と第三身分の平民（そのなかで財産のあるブルジョアジーが有力）のあいだの対立が明らかになる。6月、第三身分の議員たちは自分たちの集まりこそ国民議会だと唱えていざこざになり、球戯場に集まった彼らは、憲法がつくられるまで解散しないと誓った。7月、全国三部会は、憲法制定国民議会になった。この事態に、旧体制を守ろうとする宮廷と貴族たちは軍隊を集め始める。1789年7月14日、パリの民衆が蜂起してバスティーユ牢獄を占領した。すでに各地で騒動を起こしていた農民は、このころには領主の館を襲うようになった。革命が始まったのだ。

事態の背景には、社会の進展と啓蒙思想が、人々の考え方を大きく変えていたことがあった。自由主義的な貴族たちが、状況に押されて第三身分の議員たちに妥協する。8月、議会は「封建制を廃止する」と決議する。国民を統合した市民社会をめざすことになった議会は、さらに、人権と市民権についての宣言を採択した。思想・言論・信教の自由と権利の平等・国民主権・所有権など、近代社会の市民の権利が初めて確認されたのである。

しかし、ルイ 16 世は議会の議決をすぐには認めない。10月、パリの民衆がヴェルサイユ宮殿に押しかけて、国王一家をパリに連れて行く。国王は議会の決定を承認するしかない。国内が混乱する中、国外に亡命した貴族たちは革命政府を倒そうと動き、外国もそれを援助する。王と王妃は子どもたちをつれて脱出を図るが、不運にも国境近くで見つかってしまう。1792 年、周囲の外国と戦争になった。状況はいっそう緊張する。全国からパリに集まった義勇兵と民衆は、王宮を襲撃して国王一家を捕えてしまう。ついに王政が廃止された。

これが、近世社会を近代に転換したフランス革命である。中国式の易姓革命ではなく、カペー姓の王朝が倒されたあとには王のいない国民の共治体制ができた。フランス革命は重要な出来事だったが、詳細を記述する紙幅はない。急進派が政権をとって血なまぐさい恐怖政治になった状況に、革命の真の中心勢力であるブルジョアジーは、民衆や農民の要求が行き過ぎるのを恐れて、1794 年、クー・デターによって急進

派を倒した。国民公会から左翼議員が追放され、有産者階級の主導する政権ができた。そのあとの政治には紆余曲折があって、王が国家の首長になることが 1870 年まで続いた。しかし、政権の中心勢力は有産者階級であり続け、現代までその体制は変わらない。

じつは、有産者階級を中核とする市民が政治をしきる体制は、フランス革命よりも前のアメリカ合州国の独立によって始まった。それは、近代の市民による政治体制の典型的なモデルだから、重要である。

北米大西洋岸のイギリス領は、英国王の支配下にあったがそこに領主がおらず身分制のない自由な社会で、自立する多数の農民がいて、商業や手工業も発展した。本国へ綿や穀物を供給し、逆に機械類や綿織物などを輸入して、本国を追うように経済が進展した。各州に市民と呼ぶことのできる住民の参加する議会があった。…… ついに 1776 年、諸州の集まる会議が独立宣言を採択した。文案作成に参加した B. フランクリンの自伝が当時のアメリカの社会と自立した人間の生き方を教えてくれる。君主のいない最初の共和国であった。政治権力の危険を知っている近代的な市民たちは、民主的で分権的な制度を採用した。二つの議会の代議員は、まだ投票権に納税額による制限があるけれども、広く市民の選挙によって選ばれる。人間社会の過去の失敗から学んで立法・行政・司法の三権力は分立させた。フランスの革命政府は、諸権利

の尊重など合州国の政治制度を手本とすることができた。

独立したころ、アメリカ合州国の人口は 400 万近くだったらしい。その後も、多くのヨーロッパ人が移民して、人口は急増する。それは、経済を膨張させ、強力な国を生み出す。

1700 年代の英国の人口は、仏・独にくらべれば人口は半分、たぶん日本の人口の 1/3 あまりしかなかった。その島国で目を見張ることが始まった。1710 年ころから、工場で機械を動かす蒸気機関が使われ始めた。それまで人間は、動力を得るのに人力・牛馬の力・水や風の力しか知らなかったから、燃料を燃やした熱で動力を得るという発明は画期的なものだった。織機などの機械類が諸生産物をたくさん生産するようになった。燃料となる石炭を掘るのも重要な産業となる。増大する生産物を運搬するために、運河が建設され、蒸気機関車が走り始める。アメリカ合州国の独立とフランス革命の前 1870 年ころからは、諸産業が刺激しあってさらに大きく発展を始める。工業全体を支える鉄の生産量の指数関数的な増加グラフが、それまで歴史上なかった経済活動の拡大を教える。これが産業革命と呼ばれるものだ。

社会の構造がどんどん変化していく。産業で成功した産業資本家が有産者階級に加わってますます大きな勢力になる。領主や大地主も資産を資本として投資するようになる。毛織物産業に参加するために農地を羊のための牧草地にすることが流行した。その囲い込みなどによって土地を失った農民

は都市に出て産業労働者などになる。工場の集まる都市がますます発展していく。農村人口はまだ多いけれども、資本主義的な経済が農業を中心とする経済を圧倒するようになる。そのころすでに発明の利益を特許で守る法律ができた。産業革命という呼び名は、経済にとどまらず社会にまで及ぶその大きな変化を指している。それは政治にも及び、有産者階級が主導するイギリスは、世界の覇者として 150 年君臨する。

資本制経済の成功によって 1800 年代のヨーロッパとアメリカ合州国の社会は変質していく。人々の生活がまだ残っていた中世的な様式から近代的なものに変わっていく。そして、市民の考え方やふるまい方はいわゆる合理的なものに変わっていった。今日のわれわれは分刻みの時間を惜しむようになっていくが、それは、人々に「時は金なり」という資本主義志向がしみついたからである。経済の発展からもたらされたこの世紀のモダンな生活は、文化一般を画期的に興隆させた。美術や文学の諸作品がそれを示しているし、諸科学の進歩も同じ社会が生み出したものである。

諸科学の発展が工場の機械化を押し進める。自然科学の知識はすぐに応用されて工場の生産性を高めるために利用された。技術革新は工場経営者に競争相手よりも大きな利潤をもたらす。工場経営者が利潤を増やす方法には、機械化だけでなく、労働量を増やし生産量を高めて利潤の総量を増やすやり方がある。労働者を安い賃金で雇い長い時間働かせるこ

とが手っ取り早い。初期の産業資本主義の時代に（今も）この方法がとられ、女性や子どもまでふくむ労働者がその犠牲者になった。マルクスの経済研究はそういう人間を苦しめる経済上の問題を解決することが重要な目的であった。

ヨーロッパとアメリカ合州国の資本主義は、さらなる経済的利益の追求に向かう。まだ帆船が主流であったが蒸気船も登場して海外貿易の条件が整っていた。蒸気船は海軍力の強化でもあった。こうして、資本制経済によって強国になった諸国が、それまでを上まわる規模で海外に進出することが始まった。イギリスやオランダなどがすでにやっていたように、自国から遠い土地を領土的に支配するやり方である。文明の点で遅れていたアフリカ諸国の分捕り合戦が展開した。少しあとには文明国であった東南アジアが犠牲になった。人間の欲望にはきりが無い。それを“物神”となった資本のせいにすることはできない。

遅れていたドイツとイタリアの統一が完成し、政治体制を変更した日本が近代化を始めた 1870 年ころ、諸強国の海外領土獲得競争はさらに激しくなった。軍艦が鋼鉄船になると戦闘力が増す。世紀末には、アメリカ合州国がスペインからフィリピンを奪取し、イギリスがオランダから南アフリカを奪取することまで起きた。じつは、この出来事を経済面から見れば、150 年間にも及ぶイギリスの覇権の終わりと、それに代わってアメリカ合州国が覇者になったことを象徴して

いた。ヨーロッパなどからの移民で絶えず人口が増えたことが、アメリカ経済を膨張させて世界システムの中心地にしたのである。

1900 年代になってもこの方向への慣性力は働いていた。海外領土獲得競争が一段落つくと、ヨーロッパの強国のあいだに政治学者の言う地政学的緊張が高まる。経済的利害関係が強国を二手に分け、つばぜり合いがついに戦争になってしまふ。第一次世界大戦である。歴史上なかったほど多数の戦死者を出した。それは、有産者階級が経済的利益を追求するのにそれまで以上に政治に介入し、経済と政治を結合して運営するようになった国家間の戦争だったからである。そういう近代国家は、歴史をたどれば多かれ少なかれ雑多な諸地域であった住民のあいだに連帯感つまり社会の一体感を醸成したからである。一国の住民は“国民”という呼び名を受け入れるようになっていた。そういう国家間の戦争は、互いの国民が総力をあげて戦う戦争になったのである。

第一次世界大戦が終わって 20 年経つと、遅れて近代化された独・日・伊で、戦争の悲惨を忘れた時代遅れが政権を取った。そして、時代遅れの国外征服へ舵を切った。戦争を引き起こさずにはおかない。そうして、第一次世界大戦よりもさらに悲惨な第二次世界大戦が起きた。今度の総力戦は、戦争は軍隊のあいだの戦いで非戦闘員は殺さないというそれまでの慣例を破った。都市が無差別に爆撃され驚くほどの住

民が殺された。人間が未熟であることをはっきりと教えた。

それは人間たちへの教訓となったのだろうか。大いに疑問だが、戦争が終わった 1945 年から、経済的に順調だった米国だけでなく、大きな損害をこうむった英・独・仏・伊・日本で経済が復興した。それは、それらの国々にはほかの国々よりも強く根づいた資本主義的経済社会システムがあったからだろう。われわれはその土壌の上で生活している。

1900 年代からは考察とは言えないものになった。最近、“資本主義のその先”を見通そうとする言説がいくつか高名な知識人によってなされているが、そこでも現代の資本主義社会システムのアキレス腱を具体的に挙げながらの議論はなされていない。それは困難な作業だということである。老園丁にそれができるとも思えないが、考え続けたいと思う。それにしても息切れしてきたので、ここで中断しよう。

この節は、人間の社会がどのようなものだったか、人間はどのような経済活動を行なってきたかを知ろうとして歴史を探究した。それは、人間と社会をよく知って、これからどうすればよいかの指針を探ることだった。しかし記述が長すぎ、よい指針を得るには不向きであった。